

研究ノート

援助論教育と「物語」

小山 聡子

'Narrative' and Education for Helping Method of Human service Professional

Satoko Oyama

対人援助におけるキー概念としての「受容」について論者毎に意味するところの違いを検討し、「他者理解」と読み替えて学生に伝え、そのスキルを身につけるトレーニングのため、さらに援助にまつわる諸概念を直感的に理解するために小説をはじめとする「物語」を取り上げてきた。特に、2004年度より担当している社会福祉援助技術論Ⅰの援助論教育実践において、「物語」を利用したプロセスと意図、妥当性、方法について論じた。

キーワード 援助論、他者理解、物語、文学

はじめに

大学の社会福祉学科で約10年マイクロレベルのソーシャルワークを専門とし、対人援助論関係の教育実践¹⁾に取り組んでいる。特に2004年度より担当している社会福祉援助技術論Ⅰ²⁾において、「受容」という概念の理解をめぐって、そこに「物語（ナラティブ）」利用を関連付ける形で研究、教育実践を展開してきた。2006年度はそれを継続しつつ「受容」のみならず対人援助に関連する諸概念理解と、個別の生活者が含まれる状況への想像力涵養に目的をさらに広げる形で「物語」を利用した。

第一に「受容」を読み替えた「他者理解」概念の理解及びそのトレーニングを目的として、第二にその他援助論をめぐる諸概念の理解を助けることを目的として援助論教育に「物語」を利用するにいたるプロセスと意図及びその方法を記述することが本稿の目的である。

1. 他者理解トレーニング

(1) 用語の整理

まず、用語について整理しておきたい。筆者がここでいう「物語」とは、近年援助理論として注目を集めているナラティブアプローチにおける「物語」を意味している。すなわち「さまざまな出来事や思いをつなぎ合わせて何らかの結末へと向かうお話」³⁾のことである。この中には、古くから多くの人に親しまれてきた「童話」や「昔話」、有名な古典文学などのみならず、近年の小説、映画やドラマ、ドキュメンタリーなど、さらには個人の失敗談や成功談といったライフストーリーも含まれる。社会福祉援助技術の中で多用される個別事例もこれにあたる。

ただ、このようなくくりは社会福祉援助関連以外の領域から見るといかにも雑駁な定義となる可能性もある。筆者がこの間、議論をするプロセスでも類似の内容を表し、かつ意味内容およびニュアンスが少しずつ違うものとして「文学」「小説」

「文芸テキスト」といった用語が浮かび上がった。「文学」や「小説」が作品というイメージを持つとすれば、「文芸テキスト」はその読みや解釈が広く受け手の側に開かれているという意味で、より「物語」に近い意味を持つとも言える。ともあれ、こういったことに関する議論は文学理論の助けを借りての別稿に譲り、ここでは、とりあえず「物語」をナラティブアプローチに言う上記の意味に使用する。

(2) 受容再考

社会福祉の直接援助関連の教育においては、援助プロセスを通じて貫くべき原則として「受容、傾聴、共感」がたたきこまれる。受容とは、第一義的には相手があるがままに認め受け止めることであり、これは援助者としての自己が抱く価値観とかけ離れた言動を示す相手に対しても一貫して示すべきものとして教えられる。しかし、講義や演習の課題⁴⁾に直面したときに、初心者である学生は、しばしば「自分と全く価値観の違う相手を受容しろといわれても無理だ」といった感覚を言語的、非言語的に表明するのである。一方、注意深く見ると、「受容する」といった行為自体、その意図と方法が理論や論者ごとに違って位置づいているのも確かである。

1) 各論者の「受容」

バイスティック⁵⁾は、「受け止める（受容）」をケースワークの原則の一つとしてあげ、その目的を「援助の遂行を助けること」とした。ケースワーカーがクライアントをありのままの姿で理解し、援助の効果を高め、さらにクライアントが不健康な防衛から自由になるのを助けるとした。このような援助を通して、クライアントは安全感を確保しはじめ、彼自身を表現したり、自ら自分のありのままの姿をみつめたりできるようになる。

また、いっそう現実在即したやり方で彼の問題や彼自身に対処することができるようになるとした。その根底には「いかなる人間も、その人に独特な固有の価値を持っている。また生まれながらの尊厳、価値、基本的権利、欲求をもっている。」というキリスト教に基づく価値がある。

システム論に基づく家族療法では、技法のひとつとしてシステムへのジョイニング（お仲間に入れていただくこと）を上げており、これが行為としては受容と良く似ている。システムとは、ある一定の法則にしたがっているかのような活動を繰り返している複数の部分からなる集合体であると説明する東によると、具体的には次のような対応が説明される⁶⁾。

- ① 相手のムードや雰囲気（家族なら家風）にあわせること。
- ② 相手の動きにあわせること。
- ③ 相手の話の内容にあわせる事。
- ④ 相手のルールに合わせる事。

例としては次のようなことがあげられる。

——親子で面接に来て、子どもに話を聞きたいのにすぐ口をはさんでしまう母親に対して、それをとがめることをせず、そのたびに繰り返し母親に対し、「お子さんに聞いてもいいですか？」とたずねる。母親は繰り返し大仰に礼儀正しく問い合わせる援助者の姿に笑って遂に子どもの発言に任せる。これは現象としては自発的に見えているが、実は、援助者が変化を導き出すために働きかけているという認識である。

自己理論を展開したカール・ロジャーズ⁷⁾は、人間を先天的に良くなる（成長する、自律する、独立する）傾向を持った有機体であるとした。よって、自らの体感に正直に＝ホンネにきづいた自己一致の状態にならなければならない。それには、人格変容＝パーソナリティー成長のためのプロセスをたどる必要があり、その経過で、援助者

に受容される必要がある。ロジャーズによる人間の変容は、次の手順を踏むとされる。

- ① カウンセラーがクライアントとコンタクトを持つ
- ② クライアントは自己不一致の状態にいる。
- ③ カウンセラーは自己一致の状態にいる
- ④ カウンセラーはクライアントに対して無条件で好意の念を持つ。
- ⑤ カウンセラーはクライアントの枠組みで相手の世界を感じ取り、共感的理解をする。
- ⑥ カウンセラーが④⑤の状態であることを相手に伝える。

社会構成主義に基づくナラティブアプローチでは、「受容」と地続きのところにあると考えられる「傾聴と共感」に関して次のように述べる。それは、援助者とクライアントの間に信頼関係を樹立するためという目的は自己理論などと同じである。しかし、ナラティブアプローチでは、「自己の核心」というものを想定せず、自己とは常に社会関係の中で構築されてゆく存在であると考えられる。目的はパーソナリティーの成長ではなく、未だ語られなかった物語の創造である。成長という概念には、変化のプロセスに一定の望ましいコースがあると言う考え方が根底にあるがナラティブアプローチではそう考えない。よって、そこに起こると想定されるのは、上記それぞれの理論に見た「今すでにあるものの変化」に対して「今ないものの創造」というとらえ方になる⁸⁾。

ナラティブアプローチと同じく社会構成主義に基づく感情社会学では、「人はその所属する社会や文化、コミュニティが決めた礼儀作法、ルール、儀式、規則にのっとって振舞おうとし、さらに感じようとする」ととらえ、その適切さの基準を「感情規則」と呼ぶ⁹⁾。これは、違う文化における気持ちの表し方の差に戸惑う例や、育児において「そんなことで泣くんじゃない」と声かけを

する親の姿を思い浮かべれば容易に理解できることである。我々が、その所属する文化の中で想定されるように振舞うとするならば、対人援助における「受容」とは一種の感情労働ということになる。

2) 学生の戸惑い

実際の演習場面に来たときに多くの学生が戸惑いを示すのは、自分の中にわかあがる相手の言動への違和感や自分の感覚とのズレをどう整理、処理しながら「受容」に該当する姿勢をとるかというところが理解しきれないからではないだろうか。感情社会学はさらに、感情規則と実際に実感された感情のずれを埋めるために用いられる管理技術を「感情管理」と呼んでおり、その中に「表層演技」と「深層演技」があるととらえる¹⁰⁾。表情や身振りなどを作るとされる表層演技は前述のシステム論におけるジョイニングに近く、一方、自己誘発した感情を自発的に表現するとされる深層演技は状況によってはバイステックやロジャーズの言う「受容」に近いと言えるのではないだろうか。システム論における家族療法では、特定の価値観に与しない、ないしは様々な価値観をメタレベルから見ることが心がけるため相手の文化、文脈にとりあえず同調する行為としてのジョイニングがなされる。それに対してバイステックのようにそれも含む人間観という価値基盤の上にこう接するべきであると説く受容は深層演技に近いと考えられる。このように見てゆくと、同じ違和感の整理や処理もその考え方が立場によって違うと考えられる。

また、社会福祉援助活動には、その歴史をたどると隣人への友愛や地域での感化といった「心」をそのオリジンとする部分があり、倫理、価値の基盤を重視する教育姿勢が存在する。同時に、他

者の多様な思考や思想を尊重することを訴えるため、場合によってはそのような価値（他者の多様性）を認めない、というような人の言動をも一旦は受け止めざるを得ないわけである。また、慈善や慈悲から脱却して、当然の権利や差別禁止の範疇で生活保障と各種サービス受給を訴える近年の流れにより、「心」や「やさしさ」のようなものは、むしろサービス提供側と受給側の強弱、上下関係を作るものとして排斥される場合もある。こうした価値内部に潜む矛盾を整理することなく学生に「受容」を伝えた場合、学生ごとにさまざまな位置づけをもつ未消化感をひきずることになると考えた。

こうして社会福祉援助技術論Ⅰでは、とりあえず前述の各観点による受け止めの違いを明示した上で、「受容」のここでの定義づけを「相手の言動が援助者としての自分の好みに合おうと合うまいと、現実によりうることでありとリアルに感じ、腑に落ちること」と提起し、また、どうしても相手の全面的承認と誤解されがちな「受容」という用語を改め、もっと中立な響きを持つ「他者理解」という用語を提案してきた。

(3) 物語利用の妥当性と手順

1) 「物語」利用の経緯とメリット

そもそも筆者が物語の全体像を考えることで、受容・傾聴・共感の下地を作る、という目的の基に、学生に対し、小説、童話、漫画、ドラマ、映画などストーリーのあるものを題材にトレーニングすることを勧めたのは、自分自身の読書体験から得た次のような実感があったからである。筆者が読書を愛好する者として、ある時期読んだものに、京極夏彦著「笑う伊衛門」¹¹⁾があった。これは、四代目鶴屋南北の書いた歌舞伎の台帳「東海道四谷怪談」を題材にして、新たなお岩さん像、伊衛門像を描いたものである。筆者としては、あ

る種エキセントリックであることを感じつつも、お岩の人間像に共感できるものがあった。そこで、原典をこどもむけに書き直した四谷怪談に接してみたところ、著者の高橋克彦氏が以下のように述べている場面に遭遇した¹²⁾。

「・・・（原作のおもしろさが映画などではダイジェスト版になってしまい描ききれていないと残念に思っていたところ、）台本を小説の形に直して、しかもいまのわれわれにわかりやすいことばでという依頼が来た。やりがいのある仕事だ。・・・原作があるのだから、そんなに厄介な仕事ではないと甘くみていたのに、実際は反対だった。なぜここでお岩さんがこういうことばを使うのか？なぜ伊衛門はこれほど無慈悲になれるのか？南北の真意がなかなかつかめない。そのままわかりやすい言葉に直すのは簡単でも、私が納得できないと一行も前に進めないのだ。結果として一年がかりの仕事となった。・・・」

これは、私達が社会福祉援助において自分と状況や価値観の違う他者の言動に違和感を感じ、どうしても納得や受け入れが出来ない状況と酷似してはいしまいか。そこで、「物語を通して、他者の人生ストーリーに敬意を払う姿勢と柔軟に理解しようとする想像力を養い、自分の持っている価値観に気づいてゆくことが出来るのではないか」という考えに確信を得て、学生に対して次のような理由を説明した。第一に、物語は現実の要素を多分に含んだフィクションであり、現実世界では容易にアクセスできないであろう領域についても倫理上の不安なく、安全に学べる。例えば犯罪行為をはじめとする社会的な逸脱行動について学び、理解しようとする時、現実にある事例にアクセスすることは多くの場合困難であり、倫理的な課題をとまなうことも多い。第二に、場合によってメタファーとして援助論理解を助ける。第三に、何より、おもしろい。（へたな事例よりもリアル

である) 大塚は、ノンフィクションも自然主義小説も、「おもしろさ」とは「事実」ないしは「体験」のおもしろさとして常にあると述べている。さらに、悪く言えば「私生活の覗き見」に始まって、ノンフィクション的、ドキュメンタリー的な「事実」そのものに私達は「おもしろさ」を感じるという。他人の体験はそれだけでおもしろいという「おもしろさ」のあり方を指摘している¹³⁾。第四に素材が豊富で選り好みである。第五に、自己とはセルフストーリーであるという物語モデルの考え方を重視するためである¹⁴⁾。総じて、物語はあなどれない。優れた小説にはこうした様々な状況に対する豊かな想像力に満ち溢れたものが存在すると考えた。

2) 「物語」の解釈

筆者は1年次の導入教育¹⁵⁾において、援助論の理解に向け、童話をメタファーとして利用することを行ってきた。そのプロセスで、いわゆる「国語」の読解として「物語」に接した学生が、筆者の提示する様々な解釈のバリエーションや読みの可能性をめぐって違和感を抱くことがあるという事態にも直面した。しかし、社会構成主義における「理解」の意味を踏まえて、こうした様々な角度からの解釈を前提として文学を利用することの根拠は文学理論の中に見出すことができる。

ジョナサン・カラーは、作品に対してある反応を示すとき、読者はどのような手続きを踏んでいるのかに着眼して、何が意味を決定するかについて論じた¹⁶⁾。何が意味を決定するかということに関して、文学理論においては次のような立場が考えられるとされる。第一の立場は、話し手、書き手の意図が意味を決めるというものである。第二は、意味はテキストの中にある、すなわち、意味は言語そのものの産物であるという見方である。第三は、コンテキストが意味を決定するという立

場。つまり、特定のある発話は何を意味しているかを知るためにはそれが現れる状況や歴史のコンテキストを見なければならない。しかもコンテキストには際限がない。第四は、テキストの意味とは読者の経験するもののことであるという立場である。

これらのどれを支持するにせよ、そうした議論がなされるということ自体が「意味」とはいかに複雑かを示すものだという。今日、文学理論においてはその作品の解釈をめぐる議論は神託すなわち作者におうかがいをたててもわからないという論が強く、かといって単にテキストの属性でも、読者の経験でもなくテキストの中であって、われわれが理解しようとするもの、強いて言えば上記第三の立場、コンテキストによって決定されるという見方が強い。

このように、意味がコンテキストによって縛られているにしても、そのコンテキストなるものは無限である。そして解釈学には2種類あるとされる。一つ目は作者をとりまく状況とその意図を再構築しようとする「回復の解釈学」であり、二つ目は、テキストが依存している可能性のある未だ分類されていない前提、例えば政治的、性的、哲学的、言語的な前提を明るみにだそうとする「疑いの解釈学」である。こうした議論を知ると、ひとつの「物語」をめぐって多様な読みの可能性を提示し、限られた自分個人の価値範疇からは到底理解できないと感じる作中人物に対して、その言動に必ずしも同意や賛意を示さずとも、それまでとは違った理解をすることは出来るし、社会福祉援助論の勉強にとって有効であると考えられるのである。

3) 考証の手続きの逆利用

このように、文学理論の変遷を概観した時に、コンテキストが意味を決定するという第三の立場

を取ることが妥当であり、それは、社会福祉におけるライフストーリーを踏まえた相手の理解と呼応するものがあると考えられた。この立場を逆から見たときに、その小説の持つ「意味」のリアリティーを大切にしようとした時のステップが想定できることになる。これを記述したのが、キャラクター小説において架空の世界をリアルに感じさせるために押さえるべき観点、言いかえるなら考証のステップを解説した大塚である¹⁷⁾。大塚は、歌舞伎における「世界観」にヒントを得て、キャラクターの個性とは、①キャラクターの性格や生い立ちその他の個人の特殊性に由来するもの、②キャラクターが所属する「世界」の物の見方の価値観に由来するものの2つから成り立つと述べる。よって、架空の世界を読者にリアルに感じさせるには、その「世界」に根ざした物の見方や行動をするキャラクターが不可欠だし、逆にキャラクターをリアルに表現するのは作者が生きている現実の世界ではなく、架空の「世界」とのかかわりの中であるとも述べる。

このようにして、作者がフィクションをリアルに感じさせるために使う考証の手法を、現実読み解きの側から見直したときに、我々が他者理解において必要なステップも見えてくるというのが筆者のアイデアである。つまり、現実世界はフィクションではないという意味で現実であり、そこには必ず何らかのリアリティーがある。そのリアルな他者を理解できないというのは、その他者における大塚の言うところの①と②およびそれらの相互作用について理解する過程のどこかに齟齬があるととらえられるのではないかな。

この課題意識を踏まえて図1を示しつつ、他者理解に向けたステップの説明をした。つまり、読み手が「物語」内のある対象者①を理解（受容）するには、単に現世界④に存在する個別の自己として対象者①（作中人物）を取り出して「わかる」

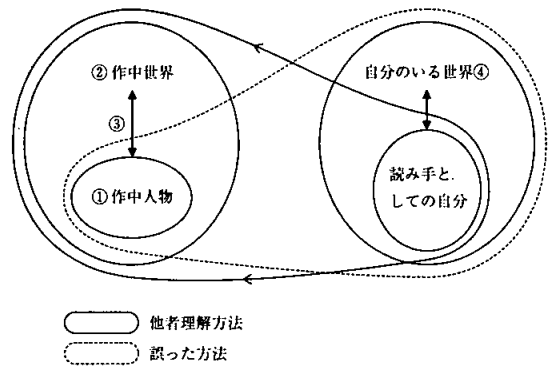


図1

「わからない」の議論をしてはならず（図1の点線で囲った方法）、必ず対象者が含まれる世界②の状況とそこに流布する価値観や慣習を十分に踏まえ、かつ対象者①の持つ個別状況も勘案した上でそれらがどのように交互に作用しあうかという③を検討する必要がある（図1の実線で囲った方法）といった内容である。「理解」を試みる対象者における前述の①、②、③を順を追ってみるということは、すなわち振り返って、読み手である自己が含まれる世界④とその世界が自分とどのように作用し合って自己の価値観が形成されているかを確認する作業を伴うことになる。

4) なぜ事例ではなく「物語」か

では、これらの作業がなぜ実際にあった事例ではなく、それを含む「物語」なのかについて前述の説明をさらに掘り下げて考えてみよう。これについては、社会構成主義をベースとする質的な社会調査の一手法であるアクティブインタビューについて記述したグブリアムらの説明を援用することができる¹⁸⁾。通常、社会調査においては、誰に回答を求めるかという判断をするときに働く社会的な装置について考慮されることはなく、回答者として不適であるとカテゴリー化された人々の声や、その人々が自分の生活について語る特定の

「内容」はインタビューのデータの中から消えてしまうとされる。ここで言う不適とされた人々の中には判断力に制約のあるとされる「子ども」や「老人」が含まれるであろうことは想像に難くない。「女性」一般についてもそうである。グブリアムらは、フェミニスト研究者達は文化的で実践的なカテゴリーセットとしてのジェンダーが社会全体、とりわけ社会科学や行動科学においてどのような物語として表現されるのかということに関心を持つとし、自分達の生活や経験でありながら女性達はその主体として不可視化されてしまうと述べた。「男性」という「女性」とは別にジェンダー化され、制度化された語彙を通して女性の経験が表現されるという。この記述の「男性」という言葉に「援助者」を「女性」という言葉に下に述べるような「被援助者」を当てはめると本稿で議論している「物語」の意味が見えてくるのではないだろうか。

社会福祉援助技術の教育で取り上げるいわゆる「事例」とは、通常援助をすると期待される側、すなわちソーシャルワーカーや看護師、保健師、教員、ケアマネジャー、保育士等の語りによる「物語」である。ということは、それらの人が援助の対象とした人々のうち、特に前述のような社会的逸脱行動や病理と表現されるようなくりの中にいるとされる人々の声は不可視化されるか、ないしは援助者側のフィルターを通した語りに変更されている可能性が高いといえる。その場合、他者理解のステップで示したような「世界と個人の相互関係解説」にいたるようなステップは踏みづらくなるのではないかと考えた。社会福祉援助の領域で例をあげるなら、虐待の加害者側とされる親やDVの加害者側である夫、薬物やアルコール依存となる人々や摂食障害に直面する人々、ホームレスとなる人、ゴミ屋敷の住人、多重債務で夜逃げをする人、いじめの加害者や、引きこも

りやニートといわれる若者など。これらの人々を単純に援助する側からステレオタイプなくくりを前提に「理解」しようとするには無理があるという場合、すぐれた小説をはじめとする「物語」に想像力涵養の場を求めることに間違いはないと感じるのである。

2. 諸概念理解に向けて

これまでに述べたように、この複雑な社会において通り一遍の想像力ではとうてい「理解できた」とは感じられない相手の状況が少しでも腑に落ちるための「物語」利用を、そうした目的も含め援助論における諸概念の理解に活用しようと考え、本年度は授業の進行にともなっていくつかの「物語」を利用した。精神科医である大平は『診療室にきた赤ずきん』の中で、患者をみたり家族に説明したりするときに「込み入った事情の全体像を直感的に丸ごと理解してもらえ」る」童話や昔話の力を強調する¹⁹⁾。援助論の教育においても複雑な援助プロセスや、矛盾に満ちた援助-被援助関係などについて理解を助けるものとして「物語」を登場させる意義が十分にあると考えた。

(1) 3年とうげ²⁰⁾

李錦玉『三年とうげ』（昔ばなし）。これは小学校3年生の国語の教科書に掲載される朝鮮半島のむかしばなしである。春には様々な花が咲き乱れ、秋には美しい紅葉が彩るその峠には次のような言い伝えがあった。「三年峠で転ぶでない。三年とうげで転んだならば、3年きりしか生きられぬ。長生きしたけりゃ、転ぶでないぞ。3年とうげで転んだならば、ながいきしたくも生きられぬ。」この言い伝えに、みなそこをおそろおそろ歩いたというが、ある秋の日に、反物売りに行ったあまりの美しさにしばらく休んで眺めた後、日が暮れるとあわてて帰ろうとしたところ、石に躓いて転

んでしまう。そのおじいさんがあと3年しか生きられないと恐れおののいて、実際に病気になっていたところへ、水車屋のトルトリ少年が見舞いに来る。そして「3年で死ぬ」を「3年生きる」に読み替えて、その坂で何度も転んでみれば生きられる年限が増えると提案し、お爺さんが実行し元気になるという物語である。

これは、「三年とうげで転ぶと死ぬ」という言い伝えを固く信じて、実際に転んだ人が、私は死ぬと思い込み、抑うつ状態になって、実際に体調が悪化するという悪循環をとらえ、3年で死ぬという言い伝えの見直しをし、3年は生きると言い換えるいわゆる「枠のかけかえ」をしている例示としてまずは説明が出来る。また、これは枠を架け替えているだけであって、おじいさんの持つ価値体系を批判したり否定しているわけではないというところにトルトリ少年の援助者としての技があるとも読める。トルトリ少年は実際に三年峠に出かけて転んで見せるおじいさんをそっと見守り、横合いから歌を歌うことで励ましている。一連の支援を社会福祉援助プロセス及び側面的支援のあり方になぞらえて説明を試みた。社会福祉援助技術論Ⅰの冒頭で導入の例示として引用した「物語」である。

(2) きつねのおきやくさま²¹⁾

これもまた小学校2年生の国語の教科書に掲載されてきた児童文学で、三年峠とならんで導入の部分で示した「物語」である。はらぺこのきつねが、道で出会ったひよこをすぐに食べるのではなく、太らせて食べるつもりで、だまして家に連れ帰る。せっせと世話をしているうちに「やさしいおにいちゃん」とほめられて、まんざらでもない気分になり、さらに世話をしているうちに、散歩に出かけたおりにさらにあひる、うさぎと連れ帰る小動物が増えてゆく。それら3匹が皆「やさし

い」とほめるので、それまで誰からもほめられたことなどなかったきつねはうっとりして、さらに熱心に世話をし、結局襲って来たおおかみと全力で戦って3匹を守りぬいで自分が死んでしまうという話である。

育てる（ケアする）ことの動機が何であれ3匹が守られた（ケアされた）という結果が同じであるところが皮肉であるとともに「相手のために」などという援助につきものの倫理や動機の、場合によって脆弱さと傲慢さについても思いをいたすことができる考えた。これは前述の3年峠とも通じる価値体系を判断する観点をより柔軟にするということへのいざないであるとともに、社会構成主義への批判として述べられる価値のアナーキズムについても思いをいたすことのできる作品として紹介している。同じ「物語」を1年次の導入教育時に利用しており、「きつねは最後まで自分のえさとして確保してあった小動物を取りにきたおおかみと戦った」という解釈も成り立たなくはないという解説に抗議をする学生の観点はまさにこの価値のアナーキズムを責めていると考えられるのである。

(3) 藪の中²²⁾

これは同作品が黒澤明監督により羅生門という映画になり、羅生門アズリアリティーと語られる有名な作品である。今昔物語の第29巻、第29話をヒントに芥川龍之介が作品化したもので、検非違使の庁（現在で言う警察庁裁判所）に引き出された当事者や証人たちの言葉をそのまま写し取って並べたという形式をとる。登場人物は、きこり、旅法師、放免（検非違使の使用人）、侍の妻の母親、盗賊、妻、死んでしまった侍の霊である。侍とその妻が旅しているところに出会った盗賊がむこうの山に古塚があり、財宝が埋まっているとだますというストーリーである。実際に盗賊多譲丸

図2 藪の中（記入例）

相手 自分	妻	夫	多襄丸
妻	<ul style="list-style-type: none"> ・ 陵辱された自分を恥じる気持ち。 ・ 死にたいと思ったが死に切れなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 夫を思いやったが、夫からさげすみの目で見られた。 ・ そのことに変な腹立ちを感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 夫をあざけていた。
夫	<ul style="list-style-type: none"> ・ 盗人に対してうっとりしていた。 ・ そのことが大変なまじかった。 ・ 妻は、盗人に対して、夫を殺せと頼んだ。 ・ 妻に殺された。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 絶望して、自ら命を絶った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 妻に言い寄っていた。 ・ 最後は、自分にも情をかけた。
多襄丸	<ul style="list-style-type: none"> ・ 妻が女菩薩のように見えた。 ・ 美しいと思い、とにかく手に入れたかった。 ・ 勝気な妻にさらに魅力を感じた。 ・ 妻を愛する気持ちが芽生えた。 ・ 妻には結局逃げられた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 夫をだまして呼び出した。 ・ 妻の懇願に殺すしかないと考えた。 ・ しかし卑怯なやり方は嫌だったので、縄をといて、五分と五分の戦いをした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 極刑にしてくれ。

各自の正当化（なぜ夫を殺した or 自死したか）、自分をどう思われたい（思われたくない）か？

妻：傷つけられた自分をさらにあざける夫への絶望。恥知らずとは思われたくない。

夫：簡単に心変わりしてしまう妻に絶望。やさしくない人間と思われたくない。

多襄丸：妻の気概に触れ、気持ちがそそられた。夫は夫で五分と五分の戦いをしたことをあっぱれと認める。
色欲だけの人間と思われたくない。

と、侍およびその妻三者が述べる内容がかなり違っており、いわゆる「同じ現実」を経過しても個人個人がいかに違ったものにとらえ方をし、違った語りをするかということを感じさせる作品である。これら主要な3者が、それぞれ自分をどう語り、残りの二者をどう見たかについて表を埋める形で他者理解の感覚をつかむための導入ワークとした。（図2）

（4）奥田英朗の3作品^{23) 24) 25)}

援助者と被援助者の関係、特に社会福祉援助の専門職が持つ「専門性」の問い返しについて、また感情労働における表層演技と深層演技の考察に関連して取り上げた。奥田英朗著の『インザプール』『空中ブランコ』『町長選挙』。これは『空中ブランコ』が第131回直木賞を受賞している作品

で、この3作を通じて伊良部というはやめちゃんな精神科医が登場する一種の誇張されたワンパターンストーリーである。よって大変笑える物語でもある。注射フェチでマザコンな伊良部医師が患者の訴える「病理的な」状況を、すべてその人の病理とはとらえず相手の言うとおりの環境を何とかする方向に（例：何人ものストーカーがつきまとう言う患者にボディガードをふやせというように）徹底してジョイニングをしてみせるわけで、そのひとつひとつが表層演技なのか、深層演技なのか、はたまた実際に信じ込んでいるのか曖昧模倣と描かれるところに専門性や援助者－被援助者関係に潜む欺瞞を揶揄する絶妙な空気を感じる「物語」である。

社会構成主義が言うところのセラピー文化批判において、無敵の強者としてたちはだかるセラピ

ストは社会福祉援助活動に従事するソーシャルワーカーになぞらえることも可能であり、そうした援用による理解の媒介役としてこの精神科医の登場する「物語」に注目した。

(5) 田口ランディ作品²⁶⁾

援助活動に従事する動機付けの振り返り、及び援助のむつかしさについて：田口ランディー『富士山』の中に収録されている「ひかりの子」を取り上げた。この作品では、自ら暖かな家族関係に包まれて成長した主人公が看護師になり、生命の誕生に立ち会う診療科ということで選んだ産婦人科で、理不尽に「殺されていく」胎児の中絶手術に立会い、どうしても患者＝被援助側に対する敵意やネガティブな思いからのがれられないという苦悩が描かれる。そこにはおしゃれに憂き身をやつし、場のルールも無視して例えば病院内で携帯電話を利用したり、病院食をそっちのけに差し入れの食べ物に手を伸ばしたりする患者としての少女が描かれ、ほしくとも子どもを産むことが出来ないような状況に立ち至った犯罪被害者の女性が同時平行で描かれることによってその理不尽さを強調して見せる。同時に、表面上いいかげんな考えて妊娠し、中絶を選択する少女が親からの暴力を受けるといった別の被害者性を抱えている現実も描かれ、総じて「誰かの役に立つために」と単純に援助職を選ぶことなどはできない現実や、また加害者と被害者、良い人と悪い人、ひいては援助者と被援助者が単純に二分化されるわけではないことなどを感じさせる「物語」である。

(6) 乃南アサ作品^{27) 28)}

逸脱行動や問題状況を通常被援助者側となるであろう側の語りとして描き、そのリアリティーへの共感から、援助者自身を含む多くの人の中に共通して存在する思いや病理であると実感させる

「物語」として乃南アサの『家族趣味』『軀（からだ）』を取り上げた。これはエスカレートする美容整形や摂食障害につながる極端なダイエットなど、場合によっては病理とみなされるような状況をその当事者の側からみごとに描き、多かれ少なかれ我々の中に存在する「毒」として自覚させてくれる作品である。

『軀（からだ）』の中に収録されている『尻』という作品では、親のコネで地方の高校から東京の大学に入学し、寮生活に入る女子学生が描かれている。その地方ではそれなりに目立つ存在であった本人も学業、外見、振舞い方すべてにおいて気後れするような環境に入り、地元で仲の良かった男友達も失う中で、あるときちょっとしたきっかけで気になりだした自分の体型を何とかすべく食事制限や食べ吐き、下剤の使用などを行うようになるプロセスがその女子学生の言葉で表現されている。前述のように、通常こういう被援助側に位置づけられてしまう人々には語る適性が割り当てられないためにどうしても援助者側の語りを通して「理解」の試みがなされることになることを考えると有意義な「物語」であると考えた。

3. 今後に向けて

社会福祉援助に限らずカウンセリングやサイコセラピーなども含む対人援助を支える理論は、社会情勢と影響しあいながら大きく変化してゆく。本稿でいう他者理解という行為も、その根底にある「価値」が場合によっては社会福祉サービスを必要とする人々を排斥するような社会の「価値」の中に実は埋め込まれていたりするのではないかという点に敏感になりつつさらに考察を進めなければならない。

他者理解における間主観性、すなわち複数の人間の間で互いの主観の状態が把握可能になることの可能性を否定する社会構成主義の考え方によれ

ば、「理解の達成とは、私の個人的な志向の結果ではなく、調整された行為の結果であり、すなわち理解は我々が埋め込まれている社会的過程によるわれわれの達成である」とされる²⁹⁾。例えば、ある自閉症の子どもが「うー。」といったのに対して「なーに？」と返せばその「うー。」は呼びかけの言葉だと見なされるが、「またか・・・」と無視すればただのうなり声となるようなことである。よって、豊富な素材の中から学生が出会い、選び吟味した「物語」の中から、学生が何をどう理解した、ないしは理解しづらいと言っているかを見ることによって、「我々が埋め込まれている社会的過程」を推し量ることが出来るということも出来る。つまり、前述の価値内部の矛盾に関連しているなら、ここにこそこうした教育実践が狭い範囲の援助スキルやテクニクに卑小化されない可能性を秘めていると言えるのではないか。

本稿で記した教育における「物語」の引用や利用に関しては、各種のリポートや記述のエクササイズを回収した一定の成果が集まりつつある。2005年度には、期末に課した課題リポートにおいて相対的に高い成績を取めた学生への個別聞き取りを行っている。また、2006年度には相対的に低い成績であった学生のリポートにおける不具合を、コメントの比較から分析する試みも行った。これらの成果を通じた教育実践の評価を継続的に報告する予定である。

筆者の担当する授業科目は、二十歳前後が中心の、それも入学試験を経ることで一定の学力を有すると想定される、また社会福祉を学びたいというゆるやかな目的意識を共有する、いわゆる「やさしい」女性達に向けて展開されるものである。そのようなグループに対して一定程度の効果があると考えられる教育実践の意味を、さらに広い社会福祉援助論教育という観点から見直してゆく必要があるだろう。

また、文学理論の検討を踏まえて、こうした教育に奏効すると考えられる「物語」の妥当性とその根拠について詳細な説明を積み上げてゆく必要がある。大塚は『物語消滅論』³⁰⁾の中で次のように述べる。「マルクス主義が終焉し、それに変わる、世界を説明するための新しく、相応に普遍的な原理は確かに見当たりません。資本のあり方も国家間の利害も人々の生き方もあまりに複雑すぎて、なかなかすっきりと説明できないでいます。しかし、その複雑さと向かい合おうとしない怠惰さの表れとして「物語」の単純さで世界を説明してしまおうという動きが急なようにぼくには思えます。」「物語」はおもしろく、大平の言うように直感的に状況を理解する面接の鏡ともなりうるものである。それだけに誤用は避けねばならず、また社会福祉援助の狭いスキルやテクニクの講義目的のみに矮小化してしまわないように留意することが常に必要である。

(註及び文献)

- 1) 援助論関係で筆者が担当している科目は社会福祉援助技術論Ⅰ、社会福祉援助技術演習Ⅰ、障害福祉論、社会福祉援助技術現場実習指導Ⅰ、Ⅱ、社会福祉援助技術現場実習Ⅰ、Ⅱなどである。
- 2) 以前はケースワーク論と呼ばれていたいわゆるミクロレベルのソーシャルワーク論である。直接援助技術としての個別援助技術および集団援助技術について論じる。
- 3) 野口裕二『物語としてのケア』医学書院、2003、p20～21
- 4) 特に2年生後期に受講する社会福祉援助技術演習Ⅰにおけるロールプレイの授業でこの傾向が強い。
- 5) バイスティック著、尾崎新他訳『ケースワークの原則（新訳版）』誠信書房、1996、

- p106～140
- 6) 東豊『システムセラピスト入門』日本評論社、1993、p61～65
 - 7) 國分康孝『カウンセリングの理論』誠信書房、1980、p72～102
 - 8) 野口前掲書、p37～40
 - 9) 石川准『感情労働とカウンセリング』日本社会臨床学会編『カウンセリング幻想と現実 上』現代書館、2000、p266
 - 10) 石川前掲書、p267
 - 11) 京極夏彦『笑う伊衛門』角川文庫、2001
 - 12) 高橋克彦『四谷怪談（少年少女古典文学館）』講談社、1995、p330～331
 - 13) 大塚英志『キャラクター小説の書き方』講談社新書、p196～198
 - 14) 野口前掲書
 - 15) 学科の教員全員がそれぞれの専門領域について入門の講義を順に行ってゆく1年次対象の基礎演習で「対人援助ことはじめ」と題して『きつねのおきゃくさま』を使った授業を展開している。その教育実践については、小山聡子「きつねのおきゃくさまに見る援助論」日本女子大学社会福祉学科、日本女子大学社会福祉学会編『社会福祉』第42号、2001参照
 - 16) ジョナサン・カラー著、荒木映子他訳『文学理論』岩波書店、2005、p98～102
 - 17) 大塚前掲書 p220～223
 - 18) ジェイムズ・ホルスタイン、ジェイバー・グブリアム著、山田富秋他訳「回答者の適性の割り当てと回答者の選択」『アクティブ・インタビュー 相互行為としての社会調査』せりか書房、2004、p55～80
 - 19) 大平健『診察室にきた赤ずきん』新潮文庫、2004、p44～59
 - 20) 李錦玉『三年とうげ』教育出版 新版国語3上、1998
 - 21) あまんきみこ『きつねのおきゃくさま』教育出版 新版国語 2上、1998
 - 22) 芥川龍之介『藪の中』新潮文庫、1968
 - 23) 奥田英朗『イン・ザ・プール』文春文庫、2006
 - 24) 奥田英朗『空中ブランコ』文芸春秋、2004
 - 25) 奥田英朗『町長選挙』文芸春秋、2006
 - 26) 田口ランディ『ひかりの子』『富士山』文芸春秋、2006、p215～269
 - 27) 乃南アサ『軀（からだ）』文春文庫、2002
 - 28) 乃南アサ『家族趣味』新潮文庫、1997
 - 29) K・J・ガーゲン著、永田素彦他訳「意味の共同的起源」『社会構成主義の理論と実践』p339～366
 - 30) 大塚英志『物語消滅論－キャラクター化する「私」、イデオロギー化する「物語」』角川oneテーマ21、2004、p223～224
 - 31) 大平前掲書